

Michael Alram, Deborah Klimburg-Salter, Minoru Inaba &
Matthias Pfisterer 編 *Coins, Art and Chronology II.*
The First Millennium C.E. in the Indo-Iranian Borderlands

Wien: Verlag der Österreichischen Akademie der
Wissenschaften, 2010 (470 pp.)

宮 本 亮 一
岩 井 俊 平

本書は2008年10月1～3日、京都大学人文科学研究所で開催された“Afghanistan Meeting 2008: Reconsidering Material and Literary Sources on the 6th to the 9th Century”, 及び同年11月18～20日、ウィーンの美術史美術館（Kunsthistorisches Museum）で開催された“Iranian Huns and Western Turks: Archaeology-History-Art History-Numismatics”で行われた研究発表をまとめた論文集である。本書が扱う地域と時代は、インドとイランの境界地域における西暦紀元後の最初の1000年間である。執筆者は皆、この地域、時代の歴史、言語、美術、考古、貨幣の諸分野における第一人者たちであり、本書を手に取りれば、近年の研究動向を容易に知ることができる。一方で、論文集という性格上、本書を貫く統一された筋書きがあるわけではない。また、個々の論文が扱うテーマは専門的であり、専門家以外の者が本書に接する機会は少ないだろう。そこで、本書評では、広く学術的な関心を引くために各論文の内容を簡単に紹介することを主たる目的とする。その上で、可能であれば問題点を指摘することにしたい。尚、本書は日本のみならず世界の古代中央アジア史研究を牽引してきた桑山正進の70歳を祝して、氏に捧げられたものである。

Michael Alram & Matthias Pfisterer, “Alkhan and Hephthalite Coinage”

近年、ヨーロッパの学界では、我々が普通エフタルと呼んでいた集団を、貨幣の銘文に基づき、アルハン（Alkhan）、及び Genuine Hephthalites¹⁾という2つの集団に分けて理解することが主流となっている。前者の中心地はヒンドゥー・クシュの南に、後者は北にあったと考えられている。本論文はこれらの集団が発行した貨幣に関する詳細な研究である。

まずはアルハン貨幣について。貨幣は大きく4つの段階に分けることができる。第1段階はShapur 2世（309-379）、及び3世（383-388）の貨幣の金型を再利用し、金型には表面に

1) 適当な訳語を定めることが難しいため、ここでは英文のまま表記する。

草書体ギリシア文字（バクトリア語）の銘文（*αλχαννο*）、及び特徴的なタムガ（著者がタムガ1と呼ぶもの）が追刻されている。裏面にはブラーフミー文字も見える。Shapur 3世の金型を使っていることから、貨幣の製造開始時期（4世紀末）が想定される。第2段階では、Ardashir 2世（379-383）、Wahram 4世（388-399）、及び Yazdgird 1世（399-420）の貨幣に見られる諸要素が現れる。また、表面に新たなタムガ（タムガ2）も現れるが、これは後の貨幣には見られなくなる。この段階になると新たな金型が製造されはじめる。第1、2段階の貨幣はカーピシー/カーブル周辺で発行されていたという。第3段階に入るとサーサーン朝貨幣の模造は終了し、表面には人工的に頭蓋骨を変形させた特徴的な尖頭をもつ胸像が描かれるようになり、一部タムガ2も見られるが、大部分はタムガ1である。発行地はカーピシー/カーブル地域から東方のガンダーラ、パンジャーブへ移動したと考えられ、その根拠は主として Shah-ji-ki-Dheri や Hadda 出土の一括埋葬貨幣である。第4段階では肖像の額に様々な冠装飾が見られるようになる。第3段階以降、貨幣にその発行者の名が刻まれるようになり、Khingila, Javukha, Mehama, Toramana, Mihirakura の名が知られている。著者はこれら諸王（Mihirakura は除く）に言及する Talaqan 碑文の内容に基づき、彼らが同時期に分立し統治していた可能性を指摘する。Mihirakura の死後（6世紀中頃）、インド方面におけるアルハン貨幣の発行は衰退したと考えられ、その後アルハンはインド方面から再度カーピシー/カーブル方面に移動してネーザクと接触し、独自の貨幣発行は終焉を迎える（ネーザクについては後掲 Vondrovec, 及び稲葉論文を参照）。

次に、Genuine Hephthalites の貨幣について。この貨幣は2つのグループに大別される。1つは Peroz 貨幣の模造で、幾つかのヴァリエントがあり、もう1つは前者が退化したものである。前者は貨幣表面に *ηβ/ηβο/ηβοδ* といった銘文が見え、これらは *ηβοδαλο*（エフタル）の省略形と見なされている。裏面には発行所を示す *βαχλο*（バルフ）の名が見える。また、ヴァリエントの1つ（1c）にはアルハン貨幣の第二段階に見られるタムガ2が現れる。一方、後者の貨幣は図像の退化が進み、銘文はほとんど判読できない。貨幣の大きな特徴は、表面に見える小球で、サーサーン朝貨幣と区別する大きな指標となっている。またこの小球はバルフで発行されたクシャノ・サーサーンやキダーラの貨幣にも見えるという。貨幣の発行開始時期は、描かれている冠の型式（Peroz がエフタルから解放された以後のもの）から474年以後と想定する。また、エフタルが西突厥とサーサーン朝に挟撃される560年頃が貨幣発行の最終期限と見なされている²⁾。最後に著者は、アルハン、及び Genuine Hephthalites が発行した貨幣に共通のタムガ2が存在する一方で、前者はタムガ1を、後者はタムガ2を用いるようになってゆくことから、両集団が起源を同じくする別々の集団であったと推測している。

2) Genuine Hephthalites の貨幣に関しては、最近 Alram の新しい論文が発表されたが、新しい情報は提示されていない [Alram 2011]。また、本論で扱われている山西省大同市天鎮県で発見された一括埋葬貨幣に関しても新たな報告が発表された [張・劉 2011]。

本論で大きな問題となるのは貨幣の発行地である。著者は、Shapur 2 世の時代にカーピシー/カーブル地域にサーサーン朝の貨幣製造所が存在したという N. Schindel の見解を前提とし（この考えは後掲 Cribb, Errington, Vondrovec の論文でも受け入れられている）、アルハン貨幣の第 1 段階は、この貨幣製造所を奪い利用して発行されたものとして議論を進めている。しかし、少なくとも考古学的知見に基づけば、この地域にサーサーン朝の貨幣製造所が存在した証拠は知られておらず、貨幣にも発行所名は刻まれていない。我々は、中央アジア古代史の貨幣学研究で用いられる貨幣の大部分が正当な発掘によってもたらされたものではない、という点を常に念頭に置き、注意してこれらの研究成果を利用しなければならないだろう。しかし、貨幣が歴史を理解するための重要な資料であることに疑いはなく、本論文はエフタルに関する従来の理解に一石を投じる極めて重要なものとなっている。

Deborah Klimburg-Salter, “Cultural Mobility, a Case Study : The Crowned Buddha of the Kabul Shah”

本論は、7～11 世紀にアフガニスタン東部からパキスタン北西部を支配したカーブルシャー朝期の彫刻に関する美術史的研究である。カーブルシャーは、812/813 年にムスリム軍に屈し、崇拝していた金の偶像を服従の証としてカリフに献上した。この「偶像」はマッカで展示され、その様子がアラビア語文献に残されている。本論は、この文献から彫像の図像的特徴を推定し、それをチベットおよび個人コレクションに現存する実際の彫刻と比較することで、カーブルシャー朝期の芸術における「イメージ・タイプ³⁾」を明らかにしている。

チベット等に存するこれらの彫像は、おそらく 12 世紀より以前にチベットに移動したものであり、美術史学的研究においてこれまで重視されてきた、「元位置」や「本来の機能」がすでに失われている資料である。そこで著者は、「文化の移動 cultural transfer」および「文化の機動性 cultural mobility」という 2 つのコンセプトを利用することで、元位置から移動して本来のコンテキストを失った資料を、別の角度から解釈することを試みる。このように、対象とする資料に新たな解釈の枠組みを付与するために設定されるのが「コンタクト・ゾーン」である。本論では、カーブルシャー朝が所在したカーブル川流域を中心とし、境界を接するバーミヤーン、カシミール、ザーブルといった諸地域、さらには彫像が「移動」したチベットやマッカまでを「コンタクト・ゾーン」と定義する。そして、その範囲内に存する後世の文献や、本来の位置と機能を失った模倣彫刻によってのみ、「カーブルシャーの偶像」の姿を明らかにできると述べる。本論は、移動することによって新たな意味を獲得した資料を利用するこのような方法論を定式化し、新たな解釈モデルを確立しようという試論と捉えられよう。

3) 本論においては、コピーを制作する際のいわば「見本」として共有されていたオリジナルの姿、といった意味で使用されている。これは漠然とした「範型」や「様式」といったものではなく、実在した特定の彫刻、すなわちマッカにもたらされた彫刻そのものを指しているようである。

なお本論は、新しい方法論を提示するだけでなく、当該地域の研究において重要な「カーブルシャー朝」の概要紹介にもなっている。この時代については、特に近年の研究で格段に明るくなっており（本書の稲葉論文、Filigenzi 論文などを参照）、最初に本論を読むことによって、後半に登場する関連論文の前提が理解できるのである。

Carlo G. Cereti, “*Īiaona- and Xyōn in Zoroastrian Texts*”

アヴェスタに現れる *Īiaona*, 及び中期ペルシア語文献に現れる *Xyōn* という民族に関する論考。両民族はゾロアスターのパトロンである *Vištāspa/Wištāsp* の敵として文献に現れる。著者はまず、*Īiaona* に言及するアヴェスタ、及び *Xyōn* に言及する中期ペルシア語文献の内容を網羅的に挙げ、テキストの読み、*Īiaona* や *Xyōn* が登場するゾロアスターの伝承が成立した背景を考察する。次に、*Zand ī Wahman Yasn* に言及される「広い前線を持つ軍 (*hēn ī frāx-anig*)」に注目し、普通 *hyn* [hēn] と翻字されるパフラヴィー文字が、*hywn* [*xyōn*] とともに翻字し得ることを指摘する。併せて、「前線」を意味する *anig*（及びアヴェスタ語 *ainika*）には「顔」や「額」といった意味もあることを踏まえ、問題の語を *xyōn ī frāx-anig*, 即ち「広い額をもったフン」と解釈することを提案し、アルハン貨幣に見える特徴的な尖頭との関係を指摘する。この新たな解釈は非常に興味深く、アルハンやいわゆるフン系民族の歴史を解明するための新たな材料の1つになるかもしれない。

明記はされていないが、本論の背景には、中期ペルシア語文献に現れる *Xyōn* を、Ammianus Marcellinus の著作に記されている Shapur 2 世の時代にサーサーン朝の東方に侵入してきた民族キオンと同一視する考えがあることに注意しておかなければならない。

Harry Falk, “Names and Titles from Kuṣāṇa Times to the Hūṇas. The Indian Material”

プレ・クシャーン期からポスト・クシャーン期の諸史料に現れる称号、人名を検討したもの。従来の研究をまとめた概説的な内容であり、新たな解釈が提示されているものは少ないが、現在の研究状況を俯瞰するには便利である。扱われている人名、称号の全てを紹介することは不可能なので、ここでは幾つか気付いた点を指摘しておくに留めたい。

クシャーン朝時代：称号 *yabgu* の研究状況を知るためには、本論文よりも著者が引用する *Encyclopædia Iranica* の記事を参照する方が良い。これに関連して、著者は Malyavkin の研究を引き、ソグドの君主がこの称号を帯びていたようだ述べているが、著者が *yabgu* を写したのと考ええる漢語の「昭武 (*zhaowu*)」については、それがエフタルの言葉に由来するという吉田豊の説を採用すべきであり、*yabgu* とは関係がない [Yoshida 2003]。また、*devaputra* が Augustus の称号 *divi filius* を直接採用したものであるという著者の説は、今後議論の対象となるであろうが、この称号について考察する場合、バクトリア語の *βαγοπουρο*, さらに漢語の天子との関係も念頭に置かねばならないであろう。

フンの時代：アルハンの王の1人である Khingila の自称 oḍyāna-ṣāhi を「スワートの支配者 (ruler of Swat)」と翻訳しているが、5世紀初頭に西北インドを通過した法頭がウディヤーナ (烏菟) とスワート (宿呵多) を区別していることを考慮に入れば、「ウディヤーナの支配者」とすべきかもしれない。πανορολο に関しては、Humbach の研究が参照されおらず (後掲 Vondrovec 論文の参考文献表を参照)、-ρολο の要素を含む人名は他にも知られている [Sims-Williams 2010: no. 366]⁴⁾。

Joe Cribb, “The Kidarites, The Numismatic Evidence”

エフタルと並び謎の多い民族キダーラの貨幣に関する詳細な研究。まず Cunningham に始まる貨幣研究, Tepe Maranjan 出土の一括埋葬貨幣, 榎一雄による文献研究, そして Göbl を含む 60 年代以降の貨幣研究についてまとめ, キダーラの勃興年代 (ひいては貨幣の年代) に関する問題, 及びそれに関わる Grenet と de la Vaissière の最近の研究を再確認した上で, 新出貨幣や既知の貨幣を用いてキダーラ貨幣全般の再検討を行う。

著者によればキダーラの貨幣は「クシャノ・サーサーン型金貨」「クシャーン型金貨」「サーサーン型銀貨」という3つのシリーズに大別され, それぞれのシリーズには, 関連する銅貨が併存する (銅貨の多くは Kashmir Smast 出土の新出貨幣によってその存在が明らかになった)。著者は詳細な貨幣学的分析を行い, 「キダーラ」という名の重要な王が存在したことを強調しつつ, 貨幣シリーズの年代を4世紀後半とする。著者が貨幣の年代を4世紀後半に置く根拠は幾つかあり, 例えば「サーサーン型銀貨」に見られる種々の特徴が, 4世紀後半のサーサーン朝の諸王の貨幣に見られる特徴と一致する, という見解は十分説得的である。しかし, 著者が提示する根拠の中には問題もある。

まず, Tepe Maranjan 出土の貨幣 (クシャノ・サーサーン型金貨) に見られる草書体ギリシア文字 (バクトリア語) の銘文に関して。著者は Ghirshman が提示して以来, 多くの貨幣学者が採用する説, すなわち銘文を「kidara (κιδάρο)」と読む説を支持する。銘文を kidara と読めれば, 同じ一括埋葬貨幣中に含まれるサーサーン朝貨幣との関係から, この問題の貨幣はキダーラ貨幣の年代を4世紀後半に置く根拠の1つとなり得る。しかし, Sims-Williams が述べているように, 問題の銘文は最も判読しやすい貨幣でさえ「kioooo (κιοοοοο)」としか読めず [Sims-Williams 2010: no. 213], 現時点では「kidara (κιδάρο)」という読みを採用することは難しい。また, Grenet は全く異なる読みを提示している。

次に, 「クシャーン型金貨」と類似した「samudra」という銘文を持つ貨幣の問題がある。著者はこの貨幣の発行者を, グプタ朝の Samudragupta (330-375) と考え, これをキダーラ貨幣の年代を決定する1つの根拠としている。しかし, この説には名前的一致以外の根拠

4) ここで扱われている印章の幾つかは著者の近著でも扱われている [ur Rahman & Falk 2011]。

また, 本論でも考察対象となっている著名な Senavarma 碑文は, 最近新たなテキストと翻訳が発表された [Jongeward, Errington, Salomon & Baums 2012: 227-233]。

が挙げられておらず、しかも名前も完全に一致していない。問題の *samudra* はグプタ朝の王ではなく、「クシャーン型金貨」シリーズ中の貨幣発行者の1人であったと見なすことも可能ではないか。同じく「クシャーン型金貨」に関連して、著者は同シリーズの貨幣に見える「*gadahara*」という銘文がガンダーラを指すと考えているが、疑問が残る。かつてバクトリア語文書に見える「*γανδαρο* (*Gandar*)」という地名がガンダーラと理解されたことがあったが、その後この地名はガンダーラを指すものではないことが判明した。銘文や写本レヴェルで現れる地名を既知の類似する地名に関連付ける際には極めて慎重にならねばならない。論文中で示される種々の銘文の読みが、著者自身の読みであるのか、それとも先行研究に依拠したものであるのかを示されていない点も注意が必要である。

最後に指摘しておかねばならないのは、文献の扱い方である。著者はキダーラに関する漢文史料にほとんど価値を見出そうとしないが、一方で *Priscus* の記述やアルメニア語史料に記された情報は無批判に利用している。このような文献の扱いは大いに問題であろう。

幾つか問題点を指摘したが、著者によって提示されたキダーラの貨幣に関する情報が貴重なものであることは間違いない。今後キダーラについて考察する際に本論文が果たす役割は大きいであろう。

Elizabeth Errington, “Differences in the Patterns of Kidarite and Alkhon Coin Distribution at Begram and Kashmir Smast”

Begram と Kashmir Smast で発見された貨幣におけるキダーラ、アルハン貨幣の分布傾向を分析し、4世紀後半から5世紀前半における当地の状況を推察する。まず地理的に両遺跡の中間辺りに位置する Hadda の仏塔 *Tope Kelan* から出土した一括埋葬貨幣中のキダーラとエフタルの貨幣を用いて、4世紀後半から5世紀にかけてキダーラからアルハンへ支配勢力が移行したという時間的枠組みを提示する。

考察対象となる Begram の貨幣は Charles Masson によって採集されたもので、全て銅貨である。Kashmir Smast の貨幣は1999年に始まる発掘によってもたらされたもので、総数は500枚を越え、銅貨、銀貨が存在する。まず、キダーラの貨幣は、Begram ではバクトリア型に限られるのに対して、Kashmir Smast では、バクトリア型は少なく、その他にも様々な型の銅貨が見られ、キダーラからアルハンへの過渡期のものと思われる銅貨も出土している。アルハンの貨幣は、Begram では全て小さな銅貨であり、キダーラのバクトリア型貨幣と構造、大きさが似ている。一方、Kashmir Smast では銅貨以外に銀貨も出土し、それには4つの段階が認められるという。著者は、両遺跡から *Khingila*, *Toramana*, *Javukha*, *Mepama* (*Mehama*) というアルハンの諸王の貨幣が出土している状況が、これら諸王の名を記す *Talaqan* 碑文から推察できるアルハンの支配形態、すなわち4人の王が分立し異なる地域を支配していたという状況を反映しているのではないかと推測する。さらに、Kashmir Smast において *Javukha* の貨幣が多く見られるのに対して、*Toramana* の貨

幣がほとんど存在しないという状況も、碑文の示す状況を裏付けるものだと考える。

表面採取による貨幣と発掘でもたらされた多数の貨幣とを比較検討することにどれ程の意味があるのか分らないが、碑文から推察される4王分立の状況を、貨幣学の観点から補強できるとすれば、当時の歴史を理解するための新たな土台を提供することになるだろう。

Klaus Vondrovec, “Coinage of the Nezak”

キダーラ、アルハン、エフタルと同じフン系の民族と考えられるネーザクの貨幣を詳細に分析する。カーピシー/カーブル地域を勢力の中心地としていたと考えられているネーザクは、他のフン系民族と異なり、その初期段階から既に独自の貨幣を発行し、サーサーン朝の貨幣を模造しなかった。貨幣にはパフラヴィー文字で *nyčky MLK'* (*nēzak shāh*) と銘文が刻まれ、鳥翼を伴う牛頭冠を戴いた胸像が表される。著者によれば、初期の貨幣は銘文末尾の文字に基づき2つの型 (*š* 型と *ā* 型) に分類され、サーサーン朝の Peroz が発行した貨幣に見える鳥翼冠との関係から、その発行開始時期は5世紀末頃と考えられる。

このネーザク貨幣とアルハン貨幣に共通する要素が見られることは従来から知られていた。著者は、カーブル近郊で発見された一括埋葬貨幣中に多く見られるネーザク貨幣 (*ā* 型) に重ね打ちされたアルハン貨幣や、後期のアルハン貨幣を詳細に分析し、Robert Göbl によって提唱された、4世紀末にカーピシー/カーブル地方で貨幣の発行を開始したアルハンが、その後ガンダーラ方面に移動し、その一部が再びカーピシー/カーブル地方へと戻りネーザクの貨幣製造地を一時的に奪った、という考えを再確認する。

また、著者によれば、2種の初期ネーザク貨幣そのものは、エフタルがサーサーン朝と西突厥に挟撃される560年頃まで発行され続ける。その後、西突厥がヒンドゥー・クシュ南北に勢力を拡大するが、初期ネーザク貨幣の系統を継ぐ貨幣は製造され続け、幾つかの独立した貨幣のグループが認められる。著者がアルハン=ネーザク交差型と呼ぶ貨幣はアルハン最後期の冠を戴いたネーザクの胸像が表されたもので、6世紀後半から7世紀初頭に発行が開始され、3つの貨幣製造所 (ガズニ、カーピシー/カーブル、バーミヤーン) が存在した可能性があるという。この貨幣の系統を継ぐ Sri Shahi 貨幣は、草書体ギリシア文字 (バクトリア語) とブラーフミー文字で同じ称号 (*apto pavuo/śrī śāhi*) を刻んだタイプが存在する。また、*ā* 型を継承した貨幣には、様々な型の銅貨が併存し、それら全てに共通するタムガが見られる。*š* 型はいわゆる Sero (*σηρο*) の貨幣に受け継がれるが、ネーザク貨幣の特徴である牛頭冠は最終的に破棄される。

著者は出所の不確かな貨幣からもたらされる情報の限界を自覚し、そこから導きだされる編年が十分なものではないことを認めている。しかし、他のフン系民族と同様、ネーザクに関する資料は少ない。この民族の歴史を解明するために貨幣が果たす役割は大きく、本論文によってそれらが包括的に扱われたことの意義は極めて大きい。

Minoru Inaba, “Nezak in Chinese Sources”

中央アジアに到来したフン系民族、及び突厥に関わる諸史料に散見される Nezak という語のうち、漢語で写されたものに関する考察。

この語はアラビア語史料では nizak と写され、カーピシー周辺で発行された貨幣ではパフラヴィー文字で nyčky と写される。著者は、この語を写したと考えられている2つの漢語、すなわち捺塞、及び泥孰/泥熟について主に音韻の問題を検討し、Nezak を写した可能性が高いのは後者であるとする。そして、泥孰をカーピシーの貨幣発行者と結びつける Harmatta 説を退けた上で、漢文史料中に見える泥孰/泥熟の用例を網羅的に挙げ、泥孰/泥熟が、人名と見なしうる一方で、kaghan (可汗) や tegin (特勤) などの称号 (title) を形容する雅称/美称 (epithet) とも見なしうることを幾つかの用例を示して確認する (著者は「雅称/美称+称号」という構造を持つ語を「名乗り (appellation)」と呼ぶ)。

また、著者はアラビア語史料の Nezak Tarkhān や貨幣の Nezak Shāh, そして漢文史料の用例が「Nezak (泥孰/泥熟)+称号」という「名乗り」の構造を持っていることから、これらの「名乗り」が同じ文化的背景に由来するものであると考える。そして、もともとテュルク語ではなかったと考えられる Nezak という語が、近年吉田豊によって提唱されている「エフタル語」の1つであり、突厥によって再利用された可能性を指摘する。しかし、それと同時に著者は、Nezak という語が突厥以前の政治文化を受け継いでいるものであったとしても、それを用いている支配者や首長たちのアイデンティティーや行動はそれとは別に考えなければならないとも述べ、特定の称号を、それを帯びた者のアイデンティティーと結びつける際には、慎重にならなければならないと注意を促す。

著者の立論は極めて説得的であり、本論を一読すれば、中央アジアのような史料の少ない地域を考察対象とする場合、どれほど詳細に、かつ慎重に考察を行わねばならないかを知ることができる。なお、本論文は日本語でも発表されている [稲葉 2010a]。

Nicholas Sims-Williams, “Two Late Bactrian Documents”

古代中央アジア史に関係する近年最も衝撃的な新出史料であったバクトリア語文書群を解読し、翻訳を発表してきた著者によるバクトリア語文書2点の訳注。

1点目の仏教関係文書は既発表のものであるが、テキストと翻訳が若干改められている。大衆部が伝承した戒律 (*Prātimokṣasūtra*) と考えられるサンスクリット語の樺皮写本の一部で、ブラーフミー文字の書体から6~7世紀のものと考えられている。バクトリア語部分は当初奥書と考えられていたが、実際はサンスクリット語のテキストが書かれていた1枚の樺皮を2枚に分離し、そこにできた空白部分に書かれたものであった。内容は三宝への帰依に始まる祈願文であり、当文書が仏教史上に持つ意味は極めて大きいであろう。

2点目の手紙は保存状態が悪く、全体がどれほどの長さであったのか分らない。特殊な書式から、手紙の草稿が写しと考えられており、内容は父から娘への手紙と思われる。文書

には紀年が記されていないが、音韻、正書法、統語法に見られる特徴から、その年代は7世紀後半以降、あるいは8世紀の可能性があるという。著者が提示する後期バクトリア語の特徴は、今後紀年を持たない新たな文書が発見された際に年代決定の指標となるだろう⁵⁾。

Étienne de la Vaissière, “The Last Bactrian Kings”

8世紀初頭のムグ山文書(B 8)に言及される Penjikent の領主 Čiqaṇ Čūr Bilgä の称号 *βxtyk MLK' pncy MR'Y*, 即ち「*βxtyk* 王, Penjikent の領主」のうち、冒頭の *βxtyk* に着目し、8世紀初頭のソグドとバクトリアの関係を論じる。著者はまず、*βxtyk* に関わる従来の説を退ける。そして、8世紀前半にザープリスタンで発行されたと考えられている貨幣に見えるバクトリア語の銘文 *βαγδδιγο* を、*βxtyk* と並行する語であるとみなす。バクトリア語に並行表現が見えることから *βxtyk* をソグドではなく、バクトリアの何処かを指す地名であるととし、MLK'「王」という称号に係る地名であれば、それはバルフしかありえないとする。加えて、Čiqaṇ Čūr Bilgä の父 Pycwtt が、バルフの西方ゲーズガンにおいてバクトリア語でその名 (*βησοτο*) を刻んだ貨幣を発行していることから、Pycwtt が7世紀後半にソグドからバクトリアへ侵入し一時的に勢力を確立し、その称号 (*βxtyk MLK'*「バルフの王」) を息子に伝えた、という筋書きを想定する⁶⁾。

また、著者は慧超が伝える「縛底耶」の問題も扱う。この地名は従来バルフを指すと考えられており、桑山正進が慧超の記述とイスラーム史料との比較から位置的にバルフとみなせないとしていたが、著者は改めて両史料の伝える旅程の違いに基づきバルフを指すと主張する。また、著者は、バルフを写した漢字の地名が2つの系統の発音 **baxl* と **baxt* に遡るという榎一雄の説を採用し、縛底耶、及び先述の *βxtyk*, *βαγδδιγο* が後者に属するとする。併せて、両系統のうち、前者(**baxl*)に遡る地名は仏教的文脈で、後者(**baxt*)は外交的文脈で中国に伝わり、その背景にソグド人の存在があったとする。

著者の論には幾つか解消されていない疑問がある。まず、ザープリスタンで貨幣を発行した者が、その称号の一部にバルフという地名を用いたのは何故か。また、バーミヤーン～バルフ間、バルフ～バダフシャーン間では慧超とイスラーム史料が伝える距離が異なっているのに対して、ガズニ～バーミヤーン間ではほぼ一致しているのは何故か。さらに、慧超が仏教徒であるにも関わらず、縛底耶が著者の言う外交的文脈のグループに属しているのは何故か。縛底耶については吉田豊による発音面の詳細な研究が存在するにも関わらず、それらが全く参照されていないことも問題である。しかしながら、多くの研究者の間で懸案となっている *βxtyk* や縛底耶の解釈に一石が投じられたことの意義は大きく、7～8世紀の中央ア

5) 最近になって一連のバクトリア語文書の図版が出版された [Sims-Williams 2012b]。ここには本論で扱われている2点の文書の写真も再録されている。また、既に出版されていた法律文書と経済文書の改訂版も出版された [Sims-Williams 2012a]。

6) *βησοτο* (Besut) に関しては Sims-Williams 2011 も併せて参照。

ジア史を理解するための手がかりの1つとなるだろう。

Rika Gyselen, “‘Umayyad’ Zāvulistān and Arachosia: Copper Coinage and the Sasanian Monetary Heritage”

いわゆるアラブ・サーサーン式貨幣のうち、7世紀後半から8世紀前半にザーブリスターン、アラコシアで発行された10種の銅貨に見えるサーサーン朝貨幣の影響を考察する。銅貨の発行者として、Spur, Tegin, Paugulの3人の名が知られている。これらの銅貨は、基本的にサーサーン朝のKhusro 2世が発行した2種の銀貨が原型となっているが、王冠、銘文、肖像の向きなどには、アルハン貨幣などに見られる在地の特徴が現れる。

著者は、銅貨の大きさ、重さ、銘文、図像的特徴、形態、発行所といった情報を細かく提示し、さらに各発行者が発行した銀貨も考慮に入れつつ、Spur, Tegin, PanguLの貨幣それぞれの特徴について述べる。ザーブリスターン（Zāvulistān）で貨幣を発行していたことが知られるSpurは、3人の貨幣発行者の中で最も在地のモデルに従わない傾向にあった。銀貨に見られるパフラヴィー語の銘文（pad nām yazd）がアラビア語のbismillāhを訳したものと見なせること、及びウマイヤ朝治下のシースターンで発行された銀貨を原型にした可能性のある銅貨が存在することから、Spurがアラブと関係を持っていたのではないかと推測する。同じくザーブリスターン（Zāvulistān, Zāvul）で貨幣を発行していたTeginは、もっぱら在地の特徴である「半横向き」の肖像を用いているが、サーサーン朝的特徴を有する王冠を戴く場合もある。Pangulは、ザーブリスターン（Zāvulistān）、及びアラコシアのラフワド（Raxvad）で貨幣を発行しており、大きな特徴は貨幣の銘文にバクトリア語を用いていることである。著者は、これらの発行者の同定に関する問題にも触れているが、基本的に桑山正進、及びA. Nikitinの説を参照するにとどめ、この問題に深入りしない。

著者は貨幣学の論文にしばしば見られるような大胆な推測は行わず、極めて慎重な姿勢で考察を行っている。そのため、本論で提示されている情報や見解は極めて説得的であり、近年次第に明らかになりつつある7～8世紀におけるヒンドゥー・クシュ山脈南側の政治状況を理解するための重要な手がかりとなるだろう。後掲稲葉論文と併読しなければならない。

Judith A. Lerner, “Observations on the Typology and Style of Seals and Sealings from Bactria and the Indo-Iranian Borderlands”

4～8世紀頃にバクトリアやヒンドゥー・クシュ南側で用いられていた印章、及び捺印物（以下2つを印章類と総称する）に描かれた肖像に関する考察。著者はまず、肖像の描き方に「半横向き」と「横向き」の2つの技法があることを指摘し、この両技法が当該地域の印章類を特徴づける要素であること、そして、キダーラ貨幣に「半横向き」の肖像が描かれていることから、この技法がキダーラによって採用された可能性を指摘する。

後半では、まず「半横向き」の肖像に描かれた髪型、髭、冠、ディアデム（帯状の頭飾

り)が分析される。髪型にはサーサーン朝に原型を持つもの、及び典型的なバクトリアのものが存在し、髭にはサーサーン朝とは異なるバクトリア特有のものが、それがソグディアナでも見られる。冠には、植物や動物をモチーフにしたもの、著者が“sun-jewel”と呼ぶ円盤状の意匠を持つものがあり、チューリップを表した冠が最も流行していたという。一方、「横向き」の肖像は「半横向き」のそれよりも定型的であり、髪型や髭にサーサーン朝的要素がほとんど見られず、冠を有しているものも稀である。

以上の分析に基づき、著者は印章類に見られる大きな特徴、即ち、冠を有する肖像が「半横向き」であること、それらの印章類には所有者の名前と称号が併記されること、「横向き」の肖像が描かれた印章類にはその所有者の名前のみが記されることを指摘する。そして、「半横向き」の肖像が描かれた印章類にのみ称号が記されることから、この表現技法は印章所有者の地位を表現するために採用された視覚的手法であったとし、肖像の向きは意図的に選択されたもので、所有者の地位・身分と結びついていたと結論づけている。

著者の示す通り、冠や称号の有無など、両技法で描かれた肖像の間には明確な差異が見て取れ、それが身分の違いに関係しているという指摘は非常に興味深い。勿論、本論で指摘された指標のみで身分の差異を判断できるわけではないが、この指標が同時代、同地域の壁画などに描かれた肖像の分析にも援用され、研究に新たな視点が加わることを期待したい⁷⁾。

Frantz Grenet, “A View from Samarkand: The Chionite and Kidarite Periods in the Archaeology of Sogdiana (fourth to fifth centuries A. D.)”

サマルカンド周辺で進行している発掘の最新成果から、4～5世紀のソグドの状況を考古学的に推定する。Sangyr Tepe, Kindikli, Dzhar Tepe, Kafir Kalaといった諸遺跡において、当初は城塞であった建物が軍事的な機能を失い、墓地や民生用の建物として再利用されたことが発掘によって明らかとなった。著者は、この考古学的変遷から、当該地域が4世紀後半にいったんキオンの侵入による抗争の場となって衰退するものの、5世紀にはすぐに発展を開始したのだと解釈する。さらにスワートで発見された、「フン」「クシャーンシャー」「サマルカンドの領主」といったバクトリア語が刻まれた重要な捺印物と、Kafir Kala出土品とが密接に関係することを指摘し、5世紀における当該地域の発展がキダーラによる支配のもとで起こったものと判断している。この点は、キダーラの年代を4世紀後半とする貨幣学者の年代観と大きく異なっており、この差異をどのように埋めていくかが、今後の研究の課題の1つと言えよう。

ただし、遺跡において複数の方法の日干レンガ積みが認められることを根拠に、城塞の構築が複数の工人集団を雇用してなされた国家事業と判断するなど、強引な解釈も認められる。

7) 本論文で扱われた史料のうち、Aman ur-Rahman Collectionに属するものは、より詳細な研究が発表されており、併せて参照しなければならない [Lerner & Sims-Williams 2011]。

発掘者の一人である Rapin が、これを過渡期の証明と認識していることもあり、遺構の精査が求められる。

Shoshin Kuwayama, “Between Begram II and III. A blank period in the history of Kapisi”

著者が長らく主張してきた、Begram II 期（いわゆる遺宝が所属する時期）と Begram III 期（6 世紀後半以降）との間に空白期間が存在する、という仮説を再度提示する。これまでも年代の指標とされてきた「円圈印文土器」「建築に認められる円形稜堡」「38×38 cm の日干レンガ」が出土する多くの遺跡が 6 世紀後半以降に属することから、同じ要素を持つ Begram III 期をこの年代に割り付ける。また、Begram II 期の年代については、Tapa Skandar I 期に出土する土器（黒線装飾のあるゴブレット）の図面を提示して同時期であることを示すほか、近年の遺宝の再検討を紹介するといった新たな証拠も提示されている。文献資料も援用しつつ、カーピシーからカーブルにかけての地域において、遅くとも 3 世紀半ばから 6 世紀半ばまで、一切の歴史的活動が認められないとする結論も従来通りで、その原因は、キダーラやエフタルが使用した交通路がカーピシーを経由しない（より東側のウッディヤーナを経由していた）ためだというのが著者の主張である。

出土地および出土状況が確実な資料を取り扱う、いわば厳正な考古学的方法によって構築されたこの仮説は、当該地域の歴史を研究するうえで今も重要な提言となっている。一方、近年の貨幣学研究では、当該期のカーピシー・カーブル地域はサーサーン朝の Shapur 2 世、キダーラ（ごく短期間？）、そしてアルハンが入れ替わりに支配し貨幣を発行していたと主張されており（本書の Alram 論文、Cribb 論文等を参照）、本論文の結論とは大きく異なる。貨幣は、銘文や図像が当時の国王とその信仰に直結するため、政治史を語る資料となり得る一方で、その出土地・出土状況が明確なものは非常に少ない。この点が、桑山の取り扱う考古資料との根本的な違いである。こうした点を考慮しつつ、両説を詳細に比較検討していくことが（あるいは比較検討を可能とする新たな方法論を模索することが）、我々に与えられた課題といえよう。

Kurt A. Behrendt, “Fasting Buddhas, Ascetic Forest Monks, and the Rise of the Esoteric Tradition”

ガンダーラとその周辺で出土する「苦行像」を取り上げ、その背後にある思想と、6 世紀以後のヒンドゥー教との融合、地域的広がりを論ずる。著者は、まずこの種の像が仏教において森林での修行を重視する禁欲主義的宗派の思想を反映していると考え、ガンダーラにおいてはじめて制作されたとする。ガンダーラの仏教が衰退した 6 世紀以降も、持ち運びが可能な扉付きの龕像にこの図像が継承され、ガンダーラを離れる仏教徒によってカシミールやキジルなど広い地域にもたらされたという。さらにこの種の龕像および同じ石材で制作され

る小型（おそらく携帯用）の彫像にシヴァ、パールヴァティ、スカンダ等が彫刻されるものがあり、それらの分布範囲がヒンドゥー教の神像が祀られる仏教寺院の分布と概ね重なることから、この範囲において、6世紀以降に密教的な伝統とヒンドゥー教との融合が起こっていることを、テキストの裏付けも示しながら結論付ける。

移動可能な彫刻の分布から新たな文化的範囲を設定する方法は、本書の Klimburg-Salter 論文と共通しており、6世紀以降の中央アジア研究へのこうしたアプローチの有効性を示している。また、龕像に使用される千枚岩の科学的分析を踏まえた分類も重要で、産地同定を含めた今後のさらなる展開が期待できよう。

一方、ガンダーラ出土苦行像の年代が3～5世紀とされるものの、明確な根拠は示されないままである。龕像についても、苦行像とヒンドゥー像が1つの作例の中で「共伴」した事例は皆無で、両者の思想的融合を説く根拠としては薄弱である感が否めない。このような問題点は散見するが、いわゆる「ガンダーラ後期」の仏教を考える際に、苦行像やヒンドゥー像が重要な手掛かりとなる可能性を示した点で重要な論文であると考えられる。

Pia Brancaccio, “The Pottery from Bajaur: A Window into the Late Gandharan Tradition”

バジャウル地域出土とされる、特徴的な絵画で装飾された土器を取り上げ、ヒンドゥー・クシュ東南麓におけるインド系文化とイラン系文化の存在を説く。

最初に、対象となる土器の特徴を紹介し、これがバジャウル付近のポスト・クシャーン期以降の遺跡で発見されていることから、「バジャウル土器」と命名する。そのうえで描かれた人物像を分析し、その顔がアルハン貨幣の国王像と共通すること、人物が持つ植物の枝はエフェドラ（麻黄）の可能性が高いことを指摘する。したがって、この土器に表されているのが、ヴェーダ/アヴェスタに登場するソーマ/ハオマに関連する儀礼の場面であり、同時に表された動物文様などからも、インドおよびイラン両系統の文化の混在が認められ、この地域を支配するアルハンが、その文化において重要な役割を果たしたと指摘している。

しかし、土器の図像からフン族との類似や植物の種類までも特定する方法はかなり強引で、しかもこの前提が崩れると、結論の根拠が完全に失われてしまうという大きな問題がある。さらに、著者は触れないが、このような絵画装飾を持つ壺あるいはカップ型の土器は近年パーミヤーンでも発見されたほか（ただし人物像は知られていない）、よく似た人物が描かれる土器に連珠文が描かれる例も存在するなど、サーサーン朝およびソグドとの関連も想定されるため、一概にバジャウル土器と命名するのは危険であろう。

一方で、これまで彫刻を代表とする美術品ばかりで語られがちであったガンダーラ後期の文化に、このような土器資料で切り込むのは興味深く、今後類例の増加を待って、再度の研究が望まれるところである。

Giovanni Verardi, “Issues in the Excavation, Chronology and Monuments of Tapa Sardar”

ガズニに所在する仏教寺院址 Tapa Sardar について、いくつかの問題をトピック的に取り上げている。

- ①遺跡の発掘方法：発掘方法が未熟な時代に最初の発掘が行われ、その後は政治情勢のために撤退を余儀なくされたことから、調査に多くの不備があったことを自己批判する。当初の記録が残されていない点、層位が不明確な点、土器を編年に活用できなかった点などが指摘されている。
- ②寺院が Kanishka 1 世によって創建された可能性：土器に記されたブラーフミー文字の銘文（書体からは 5～6 世紀）に Kanishka の名が認められ、さらに本遺跡が所在する場所が軍事的な拠点として重要視されたこと、Dasht-e Nawor 碑文の存在などから、実際に Kanishka 1 世の創建である可能性が高いことを指摘する。
- ③遺構 69～71 番に関する新たな解釈：この遺構は、ストウーパ 64（著者の言う Phase 4, すなわち 5 世紀頃に建造）およびストウーパ 65（64 より古く、大型）を区画する壁であるが、この区域の様子を復元して図示し、塑像および壁画による浄土 paradise 的な荘厳が行われていた可能性を指摘する。
- ④祠堂 23 番から出土したいわゆるドゥルガー像：本遺跡出土品の著名なドゥルガー像について、8 世紀の東アフガニスタンにおける唐およびカシミールとの政治的な関係に注目しながら、Tapa Sardar 最終段階の造像であることを指摘する。特に、これを純粋なドゥルガー像とみなすのではなく、飾られたブツダと向かい合わせに祠堂に祀られていたことから、仏教に取り入れられた図像と解釈する点に特徴がある。

以上 4 点の考察が特に関連性を持っているわけではないが、長く発掘に携わった当事者によって発掘方法や遺跡の創建年代が指摘されている点は重要である。著者らによってすでに発表されている編年観を参考にしつつ、広くカーブル周辺の寺院と比較していくことが今後の課題となろう。

Luca Maria Olivieri, “Late Historic⁸⁾ Cultural Landscape in Swat. New Data for a Tentative Historical Reassessment”

スワート渓谷に所在する Barikot 村周辺の遺跡の発掘、および包括的な考古学的踏査によって得られた最新のデータから、スワートにおける 6～9 世紀頃の文化的状況（特に仏教とヒンドゥー教の広がり）を明らかにしようとする。

著者によれば、スワート地域はクシャーン朝期に非軍事化して経済が大いに発展した。この時期、灌漑システムの維持、道路や牧草地の管理に決定的な役割を果たしたのが仏教寺院

8) 「Late Historic」は、本論においてはイスラーム化以前の時代の「後期」を指しているようである。内容から判断して、6～9 世紀頃と捉えておきたい。

で、それは踏査結果に基づく遺跡の立地から明らかであるという。しかし、5世紀以後に仏教寺院は廃絶し、Barikotの町（ここではBir-kot-ghwandai遺跡のみを指す）も6世紀には完全に放棄されるに至る。それ以後、周辺には密教的な教義が広がって、少数の寺院のみで岩絵を描くなどの活動が継続していたが、さらに最近の調査によって7世紀にはヒンドゥー教も広がりはじめたことが判明している。

この7世紀頃から、スワート渓谷は再び軍事化がはじまる。特にTower-houseと呼ばれる建造物の分布がBarikotよりも下流に集中し、仏教遺跡は見出されない。一方でBarikotから上流は、Butkara Iや岩絵の存在などから、後期仏教（密教?）が9世紀までは残存するという。こうした文化圏の違いがチベットや唐といった政治勢力とどのように関連したのかについては、結論を保留している。

踏査結果に基づいて遺跡の内容およびその分布の粗密を明らかにし、地域社会の全体的な動態を明らかにする方法論は基本的かつ重要であるが、ここでは問題もある。まず、遺跡の年代を確定させるための土器編年がどの程度の精度で完成されているかによってその時期区分に大きな齟齬が生まれる可能性があるということである。また、寺院遺跡の立地環境を単純に機能（灌漑システムのコントロール等）と結びつける方法も、十分に根拠があるとはいえない。しかし、長年のスワート渓谷の調査によって蓄積されたデータは膨大であり、今後こうしたデータを利用した本論のような試みが増加することによって、当該地域の文化的変遷が徐々に明らかになることは確実であろう。

Pierfrancesco Callieri, “Bir-kot-ghwandai in the Post-Kushan period”

スワート渓谷に所在するBir-kot-ghwandai遺跡の調査成果を紹介しながら、スワート地域におけるクシャーン朝期以後の歴史を跡付けることを試みる。

著者はまず、この遺跡がインド亜大陸北西部において層位的に発掘された数少ない都市遺跡であり、クシャーン朝以後の数世紀にわたる豊富な出土遺物から、当該地域の編年を構築することができる点を強調する。その絶対年代については、特にMacDowallによる銅貨の編年に依拠し、それらの層位ごとの出土量を示しながら検討している。次に調査区ごとの遺構を紹介し、平面プランのあり方や石積みの方法などの変遷を明らかにするとともに、「ファッション・ウェア」と呼ばれる土器（前掲Brancaccio論文において「バジャウル・ウェア」と呼ばれている土器）の存在、熱ルミネッセンス法による分析、放射性炭素年代測定の結果などを参照しながら絶対年代を改めて提示する。

それによれば、この遺跡は経済的衰退や地震・洪水といった災害のために、6世紀初頭に麓の町が放棄され、その後は限定的な痕跡しか残っていないものの、7世紀半ばには（おそらくヒンドゥー教的文脈の中で）復活するという。このような遺跡の変遷は、かつてTucciが指摘した、漢文史料に認められるUddiyanaによる朝貢の年代と完全に一致し、さらに桑山によって提示されてきたヒンドゥー・クシュ越えの交通路の変遷による経済的衰退という

シナリオにも合致すると結論づける。

厳密な層位的発掘によって遺構・遺物の変遷が明らかにされた当該遺跡の研究は実に有意義で、最終的に示される歴史的解釈に大きな根拠を与えている。一方で、MacDowall によって示された銅貨の絶対年代については、今後の研究で前後する可能性も否定できないことから、層位ごとの絶対年代を決定するにあたっては慎重な姿勢が必要であろう。

Anna Filigenzi, “Post-Gandharan/non-Gandharan : An Archaeological Inquiry into a Still Nameless Period”

イタリア隊が長く調査を行ってきたスワート地域のうち、特に Butkara I 遺跡の建築遺構と出土品を取り上げ、4～7 世紀頃の仏教事情を明らかにする。

ガンダーラ美術史においては古くマーシャルによって提示された「5 世紀末にフン族が仏教寺院を破壊した」とする仮説にしたがって、6 世紀以降の時代が “non-Gandhara” あるいは “post-Gandhara” といった否定的な名称で語られてきた。この仮説が過去のものとなった現在でもこの用語法は残っており、それは当該期に関する我々の知識が少ないためでもある。そこで本論では、発掘によって確実な編年を行うことが可能な Butkara I の主ストゥーパ (GSt) のうち、第 4 期 (3 世紀末/4 世紀初～7 世紀) に焦点を当てて、その遺構と出土遺物を周辺遺跡と比較する。

そこに認められる壁画やストゥッコ彫刻の特徴は、著者によれば、ガンダーラ美術とは一線を画しており、むしろ Tapa Sardar や Taxila の諸遺跡から出土した彫像との共通性が浮かび上がるという。Taxila が、新たな壁画の発見などを含めた近年の研究により、6 世紀以降も活動を継続していたのは明らかであるため、5 世紀というこれまで仮定されていた画期をまたいで、美術様式は継続し、中央アジア全体で広く共有されていることをこうした事実を示していることになる。これは宋雲の記述内容とも合致しており、フン族による破仏という仮説は誤りであることが改めて証明されるとする。

広い地域を網羅した美術様式の比較研究は著者の得意とするところで、本論文でもそうした方法によって「美術様式の共有」が語られる。特に、出土時期がある程度明確なストゥッコや泥像を使用した比較は、今後の研究の足がかりとして重要であろう。

Anna Filigenzi, “The Shahi Period : A Reappraisal of Archaeological and Art Historical Sources”

前論文に続き、本論では 7～10 世紀頃⁹⁾のスワートの文化的状況を明らかにするため、最

9) 著者はこの時代を “Shahi period” と呼ぶ。7 世紀半ばにカーブルでその支配を確立したテュルク系の王朝 (テュルク・シャー朝) と、9 世紀半ばにその王位を奪ったヒンドゥー系の王朝 (ヒンドゥー・シャー朝) を合わせてカーブルシャー朝と呼んでいることによる。本書の Klimburg-Salter 論文を参照。

新の調査から得られたいくつかのデータを紹介している。

玄奘は『大唐西域記』において、スワートの仏教が衰退してきている点に触れ、さらに「異道の天祠」が十数か所存在すると指摘する。しかし、最新の考古学調査によると、当該地域では200例ほどの磨崖浮彫が発見されており、密教の文脈で理解可能な観音像や弥勒像が見出されることから、著者は7～8世紀においても「後期」仏教が十分に活動的であった可能性を指摘する。

一方で、それらの表現にはヒンドゥー教の影響が認められ、Barikot 遺跡ではヴィシュヌ派に関連すると思われる寺院遺構が発見された。放射性炭素年代測定により、最初の建築は605年から685年の間になるという。ここから発見された大理石製彫刻には、ヴィシュヌと考えられる像が存在し、近辺で発見された断片にも、ガネーシャらしき姿が認められる。さらに Tindo Dag 遺跡では、仏教とヒンドゥー教が共存していた可能性が高いという。

このように本論では、イタリア隊による最新の調査データに基づき、7世紀以後のスワート地域における宗教事情および建築・美術・考古に関する文化的特徴を提示している。ここで紹介されている遺構・遺物は、いずれも類例が少なく、今後のさらなる研究によってその位置づけを明確にしていくことが必要となろう。著者は、青銅の男性像をシャーヒー期の王侯肖像とするなど、あえて大胆な解釈を提示することで、そうした研究の方向性を示しているのである。

Ciro Lo Muzio, “Archaeological Traces of Early Turks in Transoxiana: An Overview”

著者が「初期テュルク」と呼ぶ6世紀半ばから8世紀までの時期に関して、テュルクのトランスオクシアナへの移動、あるいは影響を示す考古資料を提示する。

ソグド地域は、6世紀後半にはテュルクの影響下に組み入れられたことが文献史料から確実であり、それはソグドからそのまま受け入れた貨幣システムが採用されることから明らかである。一方、テュルクの考古学的指標としては、被葬者と同一墓室に馬を殉葬すること、馬具型式、石人の存在などが挙げられるが、これまでにトランスオクシアナから出土した考古資料を検討すると、彼らの存在を窺わせる遺物は非常に少ないという。本論文では、サマルカンド周辺の墳墓が、その墓室の軸や被葬者の頭位、金属製品の類似などから、テュルクの居住地たるアルタイ方面や北カフカスと関係する点を指摘すると同時に、天山方面やセミレチエとの共通性についても言及する。また、石人や壁画には、間違いなくテュルクを表現した図像様式が存在しており、そうした例は、アフラシアブ壁画はもちろんのこと、トランスオクシアナの各地でも若干ながら認められる。そして、類似する図像はいくつかのテラコッタ小像にも現れるが、これらをテュルクと同定することに著者は慎重である。

初期テュルクに係わる過去の調査の再検討とともに、近年の発見についても言及しつつ、トランスオクシアナにおいてはテュルクの考古学的痕跡が少ないことを指摘する点が興味深い。ただし、土葬・火葬の風習や実用的な馬具の型式、さらには図像資料に認められる相貌

といった一般性の高い諸要素を、特定の1つの民族に結び付けようとする試みは大きな危険を伴う。民族・部族という固定観念に捉われない遺構・遺物の解釈も、今後は必要となってくるだろう。

Minoru Inaba, “From Kesar the Kābulśāh and Central Asia”

種々の史料を駆使し8世紀前半におけるカーブルシャー王国と、その対外関係、とりわけコートンとの婚姻関係について考察する。まず著者は、王国の歴史に関わる研究の現状を確認した上で、8世紀前半における王国の領域が、時代的に先行するカーピシーの王国のそれ、すなわちカーピシーを西限としガンダーラを東限とする地域、とほぼ同等にまで広がっていたこと、さらに8世紀初頭に中国に至った善無畏の碑銘などからウッディヤーナも王国の支配下、或は強い影響下に入っていた可能性があることを指摘する。

次に、著者は *Li-yul-luñ-bstan-pa* (于闐国授記) などの記述に基づき、カーブルシャー・フロム・ケサルの娘婿がコートンの王であったこと、そして両家の婚姻関係が720年頃に結ばれたことを示し、どのようなルートを通じて両家が関係を結んだのかを考察する。まず、カラコルム越えルート周辺における政治状況を確認するが、いわゆるパトラ・シャーヒーの滅亡に関わる唐・吐蕃・カシミールの争いによって両家の連絡関係に困難が生じた可能性が推測できるものの、確定的なことは言えないとする。一方で、カーブルとカシミールの間に仏教的な結びつきが存在したことが、悟空の伝える情報や *Rājataranigīṇī* の記述から知られること、カシミールとコートンの間にも同様の結びつきが存在したことが、*Li-yul-luñ-bstan-pao*, 及び *Saka Itinerary* から知られること、さらに、当時のカシミール王 Lalitāditya が吐蕃に対抗するため周辺地域と同盟を結び、その相手国の1つがカーブルシャー王国であった可能性が漢文史料から推測できることを示し、カーブルシャー王家とコートン王家が、カシミールを経由して関係を結んでいた可能性を指摘する。

著者は最後に、アラブに対する勝利を強調する銘文を貨幣に刻んだカーブルシャー・フロム・ケサルの名声が上述のような仏教的結びつきを通じてカシミール、さらにはチベット方面へ伝わり、チベットの叙事詩に登場する主人公の名前 Gesar となった可能性を提示する。Gesar についてはチベット関係の史料を精査し、さらなる考察が必要であろうが、唐、吐蕃、アラブという大国の狭間にあった小国による生き残りのための外交戦略が、これほどまで詳細に明らかになったことの意義は大きい。チベットとイスラーム世界との間での文化の移動を考察する前掲 Klimburg-Salter 論文を読む際には、必ず本論を併読しなければならない。なお、本論文は日本語でも読むことができる [稲葉 2010b]。

Erika Forte, “Khotan in the Last Quarter of the First Millennium : Is there Artistic Evidence of the Interrelations between Khotan and Tibet? A Preliminary Survey”

イラン、インド、中国といった各地の文化の影響が混ざり合うコートン地域の美術史のう

ち、特に7世紀以降の状況を、チベット文化との関係から歴史の文脈に位置づける。

コートン地域については、20世紀初頭のスタインによる調査以降、ほとんど新しい知見がなかったが、本論文では、これまでの研究を丁寧に参照しながらコートンの仏教美術史を振り返り、さらに1990年代以降に行われた新たな考古学的調査についても紹介している。J. Williamsによれば、コートンの仏教壁画は7世紀から8世紀に及んでいるが、現在もこれよりも新しい壁画は見つかっていないという。その一方で、進展の著しいコートン・サカ語史料の研究によれば、8世紀末のチベットによる占領後も大きな文化断絶が起らなかった可能性が高く、考古資料の状況とは矛盾しているように見える。しかし、近年の発掘調査によって、チベット文化の影響を示す新たなコートン仏教美術の側面が明らかになりつつあるため、今後は北インドを含めた西ヒマラヤ地域全体の文化交流を視野に入れた研究が必要になることを指摘する。

仏教壁画や関連遺構について、著者独自の新たな見解が盛り込まれているわけではないが、研究史と最新の動向が分かりやすく整理されており、今後の研究の方向性を示す論文として重要な位置を占めていると考えられる。

以上、各論文の主旨を簡単に紹介した。冒頭に述べた通り、各論文は独立した内容を持ち、本書を貫く統一された筋書きはない。一方で、幾つかの論文が共通する問題を検討している場合がある。ここではとりわけ重要な問題と思われる2つの点について若干のコメントを付しておきたい。

まずは、キダーラやアルハンなど4世紀後半から5世紀前半の中央アジアに展開した民族の年代などについて。貨幣に基づくCribbによれば、キダーラの貨幣の年代、及びその勃興年代は4世紀後半である。一方で、考古資料に基づくGrenetはそれを5世紀前半とする。また、ガンダーラで勢力を確立させた後のアルハンの展開に関してAfram & PfistererとCribbの理解が異なっている。このように基づく資料によって年代が異なってくるという状況を見れば、研究者は各々が利用する単独分野の資料がこれらの問題を解決するために決定的な役割を果たしていないことを認めざるを得ないだろう。そのため、我々は既存のあらゆる資料からもたらされる情報を努めて客観的に、総合的に分析し、それらを共有しておかなければならない。そうすれば、例えば紀年を有する碑文といった突破口となり得る新たな資料が発見された場合にも、そこからもたらされる情報を適切に判断し、利用することができるはずである。

次に、エフタル支配がサーサーン朝・西突厥の連合によって崩壊した後の時代の理解に関する問題である。近年政治史的な理解が大幅に進捗し(Klimburg-Salter論文、稲葉論文など)、さらにほとんどの研究者が前提として共有する研究成果も存在している。その1つは、エフタル連合の崩壊に伴う交通路の変遷とガンダーラの経済的衰退という桑山による画期的な研究である[桑山1990; Kuwayama 2002] (本書の桑山論文は、その再確認ともなっ

いる)。もう1つは、イタリア隊が長期に亘って実施してきたスワート地域の考古学的調査である (Olivieri 論文, Callieri 論文など)。これに加えて、ヒンドゥー教、あるいはいわゆる密教の当該地域への浸透と混合も、多くの研究者が指摘しているところである (Behrendt 論文, Verardi 論文, Filigenzi 論文など)。今後は、こうした根本的な成果を共通の土台に据えたうえで、当該期の政治史、美術史といった個別の成果を積み上げて行くことになる。本書はまさにそういった試みの集合体であるわけだが、資料の少なさもあって、各論が孤立した状態で存在しているように思われる。この点は、時代区分を示そうとする用語の使用方法に顕著に表れており、late-Gandhara, post-Gandhara といった美術様式による時期区分と、post-Kushan, Shahi といった政治史による時期区分の用語が混在し、それらがどの時期を指すのかが論文ごとに一定しない点は、解決すべき課題であろう。

また、極端に資料が少ない中で、利用可能な資料をことごとく活用する姿勢と、そうした方法論の開発の重要性は、冒頭の Klimburg-Salter 論文で指摘されているとおりである。後世の文献はもちろんのこと、コンテクストを失った美術作品をも活用しなければ、新たな研究は難しいのが古代中央アジア史の現状であることは間違いない。その一方で、研究の前提に組み入れてもよい根本的な事柄と、「似ている」ことだけを根拠とした「解釈」部分とを、慎重に区別する姿勢もまた、研究者には求められているのである。

Alram が論文の冒頭で述べているように、本書が目指したのは各分野にまたがる「common language」の確立であろう。そのため本書には様々な分野の論文が遍く掲載されているのである。しかし、本書を通読しても、これらの研究を統合して導きだされる大きな結論が読者に与えられるわけではない。したがって、繰り返しになるが、我々に求められることは、各専門分野の最新の研究を、どのような形であれ常に共有することであろう。近年、ヨーロッパでは研究者間の交流が活発化し、研究員の異動も頻繁に行われており、日本の研究者もそれに遅れを取らないよう、積極的な発言が求められている。本書は、そのような研究の発信と共有の1つの形を示しているのではないだろうか。

最後に、本書に対する若干の注文点を挙げておきたい。まず、各論文に言及されている地名や遺跡名を網羅した地図が掲載されていれば、本書の価値はさらに増したであろう。地名や遺跡名は膨大で、その所在地を即座に知ることが難しいものも存在する。もう1点、漢字を表記する際、現代中国語の拼音と漢字を併用するという編集方針を採用して頂きたかった。漢字は著者ごとに異なる方式で写されている上に、漢字そのものが併記されていることが少なく、もともなった漢字を探すのが困難である。誤字・脱字は幾つも見られるが、深刻なものは少ないように見える。ただし、しばしば参考文献表に挙げられていない文献が本文中に言及されている場合があるので注意が必要である。

残念ながら日本には、本書で扱われている時代や地域を専門とする研究者が非常に少なく、特に若い世代の研究者不足は深刻である。しかし、幸いにも、最近になって古代中央アジア史研究における最も重要な主題の1つである「ソグド人」に関する新たな書籍が出版された

[曾布川・吉田 2011]。この書籍は研究書ではなく、広く歴史に興味を持つ者が容易に手に取ることができるものであり、本書評とも深く関係するソグド本土について多くのことを知ることができる。このような書籍を通じて、古い時代の中央アジアに興味を持つ人が増え、日本における古代中央アジア史研究が絶えること無く継続されることを期待したい。本書評が同様の役割の一端を担うことができれば望外の喜びである。

参考文献

- Afram, M. (2011) New Coins of the Hephthalites along the Silk Road. In: Shanghai Museum (ed.) *Proceedings of the Symposium of Ancient Coins and the Culture of the Silk Road* (絲綢之路古国銭幣暨絲路文化国際学術研究会論文集). Shanghai, 240-258.
- 稲葉 稔 (2010a) 泥孰攷『東方学報』85, 692-674.
- 稲葉 稔 (2010b) 8世紀前半のカーブルと中央アジア『東洋史研究』69/1, 174-151.
- Jongeward, D., El. Errington, R. Salomon & St. Baums (2012) *Gandharan Buddhist Reliquaries*. Gandharan Studies 1. Seattle.
- 桑山正進 (1990) 『カーピシー=ガンダーラ史研究』京都大学人文科学研究所.
- Kuwayama, S. (2002) *Across the Hindukush of the First Millennium: A Collection of the Papers*. Kyoto.
- Lerner, J. & N. Sims-Williams (2011) *Seals, Sealings and Tokens from Bactria to Gandhara (4th to 8th century)*. Wien.
- ur Rahman, A. & H. Falk (2011) *Seals, Sealings and Tokens from Gandhāra*. Wiesbaden.
- Sims-Williams, N. (2010) *Bactrian Personal Names*. Iranisches Personennamenbuch II/7. Wien.
- Sims-Williams, N. (2011) The Bactrian era of 223 C.E — some Numismatic Considerations. In: Shanghai Museum (ed.) *Proceedings of the Symposium of Ancient Coins and the Culture of the Silk Road* (絲綢之路古国銭幣暨絲路文化国際学術研究会論文集). Shanghai, 62-74.
- Sims-Williams, N. (2012a) *Bactrian Documents from Northern Afghanistan I: Legal and Economic Documents* (revised edition). London.
- Sims-Williams, N. (2012b) *Bactrian Documents from Northern Afghanistan III: Plates*. London.
- 曾布川寛・吉田豊 (編) (2011) 『ソグド人の美術と言語』臨川書店.
- Yoshida, Y. (2003) On the Origin of the Sogdian Surname Zhaowo 昭武 and the Related Problems. *JA* 291/1-2, 35-67.
- 張慶捷・劉俊喜 (2011) 北魏平城波斯銀幣與絲綢之路幾個問題 上海博物館 (編)『絲綢之路古国銭幣暨絲路文化国際学術研究会論文集』上海, 199-209.

(宮本亮一：龍谷大学大学院文学研究科)

(岩井俊平：龍谷大学 龍谷ミュージアム)